



オセアニアにおけるグローカリゼーション(合田濤教授・須藤健一教授退職記念シンポジウム報告)

倉田, 誠

(Citation)

神戸文化人類学研究, 2 [2] 特別:101-110

(Issue Date)

2009

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003419>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003419>



合田濤教授・須藤健一教授退職記念シンポジウム
「現代社会と人類学者—アジア・太平洋のフィールドから」

2009年2月14日（土曜日）

「オセアニアにおけるグローカリゼーション」

倉田誠

去る2009年の2月14日(土)・15日(日)の両日にわたり、神戸大学瀧川学術交流記念会館において、合田濤・須藤健一両教授のご退職を記念したシンポジウム「現代社会と人類学者アジア太平洋のフィールドから」を開催いたしました。その第一日目となる2月14日(土)には、「オセアニアにおけるグローカリゼーション」と題して、須藤健一先生のご指導をうけた教え子やオセアニアに関する共同研究を行った同僚の6名から、先生の近年の研究テーマであるグローバリゼーション下でのオセアニアの人々の適応戦略やそこで生じる困難に関する発表が行われました。以下では、各発表者の発表内容を簡単にふりかえりたいと思います。

まず、風間計博(筑波大学)による「グローバル化のなかのオセアニア島嶼社会」と題した発表では、グローバル化のなかでのオセアニア島嶼社会がおかれた状況が概略的に述べられたのち、最後にそれらの対象に対する研究の方向性が示された。

まず、風間は、概念としてのグローバル化を、啓蒙期以降の国民国家や民主主義の理念の浸透や資本主義の拡張といった長期的なプロセスとしての「グローバルな近代化」と20世紀以降のボーダーレス化やトランスナショナルな移動にともなう急激な変化としての「ポスト近代的グローバル化」の2つに区分し、現代世界において、後者が急激な時間空間の圧縮や社会生活の拡張を生み、メトロポリスへの移民流入やスラム化や非西洋から西洋への音楽・

ドラマ・料理等の文化移出といった現象によって、世界システム論にみられる中心／半周辺／周辺という世界の三層構造やその境界線を揺るがしている状況が述べられた。そのうえで、風間は、オセアニア島嶼社会の問題として、(1)国民国家としての国民統合が未熟である点、(2)他国からの経済援助や海外移民からの送金といったレント(不稼得)収入や鉱物や木材といった天然資源の輸出に依存し、経済的基盤が脆弱である点、(3)「伝統的」政体の卓越や民族間対立などにより中央政府の統治力が脆弱である点、の3つを挙げ、それらの問題の背景に、政治経済システムの「近代化」を推進／強制する「グローバルな近代化」とボーダーレスな人・モノ・情報の移動を加速する「ポスト近代的グローバル化」の2つのグローバル化が同時に押し寄せているオセアニア島嶼社会の現状があることを指摘した。

発表では、このようなグローバル化のもとにあるオセアニア島嶼社会に対して、次の2つの研究の方向性が示された。まず、1つは、グローバル化にともなう事象がローカルな理論によっていかに再解釈されているかを明らかにするという方向性である。ここでは、外部からもたらされた開発が神話や予知夢によって解釈され、そこで得られた現金が儀礼的な贈与・交換へと投入されるという事例や、出稼ぎ移民によってグローバルに拡散した人々に対して、本国側から伝統財や食品、称号などを与えることによって社会関係が維持・更新されている事例が言及された。もう1つは、グローバル化のなかで、西洋近代のヘゲモニーに対して周辺の位置におかれるローカルな論理の側が、いかに再生産され、再編され、創造されているかを明らかにするという方向性である。そして、最後に、これら2つの方向から地域社会を見ることによって、不均質性を生成・拡大させながら進行するオセアニアのグローバル化の様相を捉えることができるという見通しが示された。

次に、中原聖乃(中京大学)は、「開発のグローカリゼーション —マーシャル諸島核実験被爆コミュニティ」と題して、アメリカの水爆実験で被害を受けたマーシャル諸島ロンゲラップ環礁出身者のコミュニティがアメリカ政府による再定住計画を受容していく過程を分析し

た。

中原が注目したのは、アメリカ政府による「工学的対処」とそれに対するロンゲラップ出身者たちの対応である。ロンゲラップ環礁の人びとは、1954年のアメリカの水爆実験により、人体への被爆と土壌の放射能汚染という被害を被り、他島(メジャト島)での避難生活や都市部への再移住を余儀なくされている。それに対し、アメリカ政府は、1996年の合意にもとづいて、(1)土壌改変などによる残留放射能の除去、(2)水道や電気といった生活インフラの整備、(3)冷房やシステムキッチンといった設備をもつ被爆者用住宅の提供などを軸とした再定住計画を開始した。それに対し、ロンゲラップ出身者たちは、「エインオトチュワン(私たちは1つの家族)」や「リロンゲラップ(ロンゲラップ再定住)」といった理念を掲げつつも、実際には、親族を頼って(ロンゲラップ環礁デモメジャト島でもない)第3の島への移住を希望する者、都市部に居住地を確保して住宅を建てる者、避難先であるメジャト島の自宅周辺を整備して島での生活を確保しようとする者、あくまでもロンゲラップ環礁への帰郷を望む者などの個人的な選択により、コミュニティが拡散してゆくことになった。

中原は、このような現象をアメリカによる再定住計画のローカライズとも呼び、親族ネットワークを活用した再定住計画への対応がロンゲラップ出身者たちにとって2つの意味を持つことを指摘した。まず、1つは、ロンゲラップ出身者たちが、それぞれの居住地に張り巡らされた親族のネットワークをたどってモノや人の往来を行うことにより、都市部やメジャト島に居住し続けることの利便性や安全性と、故郷であるロンゲラップ環礁への愛着や再定住計画によって保証される近代的な生活や生活コストの安さといったそれぞれの利益をより広く享受しようとしているということである。もう1つは、もし再定住計画によって一斉に帰島しても再び放射能汚染の問題が明らかになれば再移住を迫られるという事情がある以上、このようなコミュニティの拡散と親族のネットワークの維持がリスクの分散につながっているということである。

福井栄二郎(島根大学)は、「グローバリゼーションと想像の『オセアニア』 —ヴァヌアツ・

アネイチウム島の観光から」という発表において、ヴァヌアツ・アネイチウム島の観光現場で展開されているアトラクションを取り上げ、グローバリゼーション下での観光において生じられる問題を指摘した。

まず、福井は、これまでのグローバリゼーション論を、(1)「グローバリゼーションの拡大は不可避であり、ローカルなものはグローバルなものによって飲み込まれていく」とするトムリンソンらの議論、(2)「ローカルなものは、グローバルなものと接するなかでそれらに抵抗／包摂し、姿かたちを変えながらも生き存える」とするロバートソンの議論、(3)「グローバリゼーションは、時空間を再編成し、もともとのものとは全く別種の空間を創出してゆく」とするサッセン、アパデュライ、アーリなどの議論、の3つに整理し、主に(3)の視点に拠りながら、アネイチウム島で行われている観光アトラクションに分析を加えた。

現在のアネイチウム島では、大型クルーズ船に乗って島を訪れるツーリストを相手に、「人喰い族」との記念撮影や「火渡り」ショーといった島の「カスタム(伝統)」とは無関係なアトラクションが行われ、住民の収入機会となっている。発表では、この事例から次の2点が指摘された。まず、1つは、これらのアトラクションが、「本物らしさ」というよりも、「野蛮・未開」や「楽園」のイメージによって誇張され戯画化(カリカチュアライズ)された想像の「オセアニア」という舞台装置のうえに成り立っているという点である。もう1つは、この想像の「オセアニア」という舞台装置は、どこでもよいわけではなく、「青い海」「白い砂浜」「揺れるヤシの木」というアネイチウムの場所とアネイチウムの人びとが存在することによってはじめて成り立つという点である。

この事例から、福井は、グローバリゼーションをモノやヒトの流通だけでなく、西洋人のなかにあるイメージや想像力がそのまま拡大し、現地社会に巧妙に埋め込まれ、新たな空間を生み出してゆく過程として捉え、そこで働く力関係や排除の原理に目を向けるべきであると指摘した。

石森大知(日本学術振興会)は、「宗教のグローカリゼーション—ソロモン諸島における福音

主義派の展開」と題して、ソロモン諸島における福音主義的保守派協会、なかでもペンテコステ派と総称される信仰運動のグローバルな展開を報告した。

石森は、ペンテコステ派のグローバルな伸展と各布教地域における独自の理論に着目して、それらを「グローカリゼーション」という議論のなかに取り込もうとする 1990 年代以降の議論を実際の事例に即して見直していく必要があることを指摘した。そのうえで、石森は、1990 年代以降にソロモン諸島において顕著になっている主流派教会の衰退とペンテコステ派の伸展という動きを取り上げ、首都ホニアラと村落部におけるペンテコステ派の布教戦略とその受容に焦点をあてた。

発表において指摘されたのは、次の 2 点である。まず、第 1 点として、首都ホニアラでは、ペンテコステ派の伸展は社会の都市化や近代化と関連しており、聖書を持参してペンテコステ派の諸教会を渡り歩く者たちは、礼拝時の聖霊の体験とそれに裏打ちされた聖書の真正さを介して、自らを(ホニアラやソロモンに留まらない)より広い世界に位置づけようとする傾向が見られることである。次に、第 2 点として、村落部では、メソジストの流れを汲む教会に帰依する者たちは、自らの教会こそが「ウェスレーの教会の正統である」と主張し、聖霊体験とローカルな宗教文化との関連を否定することである。

このような事例から、石森は、ソロモン諸島のペンテコステ派の伸展に見られる諸現象は、グローカリゼーションというよりも、むしろ聖書や聖霊を介して「世界水準」を志向するという点において、あくまでグローバリゼーションの一端を示すものとしてとらえるべきであると指摘し、そのグローバルとローカルの結節点で生じている人びとの生活戦略にこそ目を向けてゆく必要があると述べた。

倉田誠(神戸大学)は、「グローバル化と小規模国家サモアの医療一身の丈に合った病気との向きあい方を模索して」と題して、外部からの援助に依存した政府の医療制度と民間での自前の対処とのあいだで、「身の丈にあった」病気との向き合い方を模索するサモア社会の人びとの動きを紹介した。

発表で取り上げられたサモア社会では、グローバリゼーションの進展が、開発援助や WHO 主導による医療制度改革などに見られる「グローバル・イシューとしての保健医療」と、海外移民の増大や貨幣経済の加速度的浸透といった「人・モノ・情報のグローバルな流動」といった 2 つの局面で人びとの病気への対処に影響を及ぼしている。倉田は、それらによって生じた新たな事態として、(1) 国立の医療機関と新興の私立の医療施設との間のサービスや受診料の格差、(2) 都市部を中心とした大衆薬や健康食品の普及、(3) 「異国風」の治療法や治療者の出現による民間医療の多様化、の 3 つを挙げた。

発表では、次のような事例が報告された。まず、一つは、サモア在住やオーストラリアに移民した親族とのネットワークを駆使してお金を集め、初産を迎える妻のためにより良質な医療サービスを追求しようとした都市近郊のサモア人の事例であり、もう一つの事例は、左側の手足の麻痺に対して、過去の診療経験と事実上限られた医療サービスの選択肢から近代医療に失望して、多様な民間の治療者を渡り歩きながら対処を探ようになった村落のサモア人の事例である。

このような事例から、倉田は、グローバルな親族ネットワークを通してより良い医療サービスを追求できる近代医療では「身の丈の測りにくさ」が問題となる一方で、それを追求できない者は「身の丈に合わせることに不自由さ」を意識しながら多様な民間医療の渡り歩くことになっているということを指摘した。さらに、グローバリゼーションのもとにあるサモア社会において、「身の丈に合った」病気の向きあい方は、国家の課題としてだけではなく、そこで生活する各個人にとってもますます難しい問題として迫りつつあるという認識を示した。

山本真鳥(法政大学)は、「選挙制度のグローカリゼーション—サモアの民主主義の行方」と題して、伝統的な政治制度のなかに「民主的な」選挙制度を取り入れることになったサモア独立国の事例を紹介し、導入の経緯とその後が生じた変化や問題について発表した。

1962 年に南太平洋諸島で初めて国家独立を達成した西サモア(現サモア独立国)は、「世界基

準」の政治理念としての民主主義を取り入れるにあたって、それまでの伝統的な政治制度を新たな近代国家の仕組みのなかに残すことにこだわった。西サモアの人々は、「首長称号保持者は核親族集団の全成員の合議のもとに選ばれるので、その人々が選挙人となる選挙で選ばれた国会議員は実質的に国民の民主的な代表者である」という主張のもと、それまで植民地制度下で行われてきた首長称号保持者のみに選挙権・被選挙権があるという選挙制度を独立後も維持することを図った。しかし、この選挙制度は、選挙目的のための称号の授与や分割が横行するによって、肝心の伝統的な政治制度そのものを危機に曝す結果となり、1990年に全ての成人に選挙権のみを認める部分的な普通選挙に移行した。

山本は、この選挙制度改革が、(首長称号保持者の大半が男性であったため)新たに選挙権を獲得することになった女性たちの発言力を高める一方で、結局、称号分割や買収などの選挙違反の減少にはあまり繋がらなかったと評価した。そのうえで、選挙制度改革とサモア社会の変化を関連付け、次の2点を指摘した。まず、1点は、新たな選挙制度も出自システムによる所属村落での投票を基本としているが、都市化の進展によって居住地での投票を望む声が強まっていることである。もう1点は、選挙権を行使する選挙区が変更できるため、以前では首長称号保持者を増やしていたものが、現在では選挙人を移動させることによって有権者を確保する戦略がとられるようになったことである。

本発表の最後では、このようなサモア社会とそこでの選挙制度の変化を、「都市化、村落から都市へ、都市から海外へ」「顔の見える社会から顔の见えない社会へ」「血縁社会から地縁社会へ」といったグローバルな近代化の流れのなかに位置付けつつも、これまでの選挙改革の経緯を勘案するならば、首長称号保持者のみに被選挙権を与えるという特異な選挙制度がそれほど早期になくなることはないという見通しが示された。

以上のような発表ののち、須藤先生からは、各発表へのコメントとともに全体に対して次のような問題が提起され、それに続き発表者の側からの応答が行われた。

須藤：今回の発表では、グローバリゼーションとグローカリゼーションという現象をちよつと混同して用いている方が多かったように思う。例えば、グローバリゼーションは、先の山本さんの発表で出てきた、民主主義、人権といったようなひとつの価値をもったものが国際的なスタンダードとなってゆくという意味合いが強い。

それに対し、グローカリゼーションという概念は、交通、通信、移動とより深く関わっている。(いまでは)グローカリゼーションという概念は多様にあるが、グローバルとローカルの現象が併存するというのが当初の見かたでした。その意味では、これまで文化人類学でなされてきた文化変容とか、他の文化要素が入ってきたときにどのように対応するかといった問題意識に近い。

地球規模で強い文化や制度が世界を飛び交っているという状況に対して、オセアニアという周辺の小さな社会において人びとが地に足をつけ、どのようにそれに立ち向かっているのか？私は、外から圧倒的に強い文化要素や制度や考え方が来た場合、受け入れる側がそれを解釈し、すり替えたりしながら翻訳的に受容してゆくプロセスをグローカリゼーションという概念で捉えたいと思います。

風間：グローバリゼーション／グローカリゼーションということばに対する捉え方は、須藤先生のそれと、個別の発表者との間の定義の若干の乖離があったという印象を受けた。発表者のみなさん、須藤先生のコメントに対するリプライや付け足し、反論はありますか？

中原：須藤先生が提示された枠組みの中で、ローカル化ということばを使っていたので、少し先生が意図されたこととは違ったのかなと思っています。私は、科学的な対処法の絶対視、工学的な解決方法の絶対視を、ロングラップ政府が受け入れることこそが、グローバル化なのではないかと考えています。今回の発表で論じたかったのは、マーシャル諸島の人びとが、具体的にどのような現地の論理や親族関係をどう使ってそれをローカライズさせていくのかということです。

福井：コメントをありがとうございました。今回は、グローバリゼーションやグローバル化といったことばに引きずられないようにして発表しようと思っていました。なぜなら、グローバリゼーションという概念も西洋近代が作り出した概念で、そこには(西洋近代の)人権意識や男女平等が地球規模で拡大していくという含意があるからです。今回、発表したように、オセアニアの社会では西洋近代が持っている「オセアニア」というイメージが波及していく。その否定的な価値を彼ら自身がそのまま内面化していくということも見ていかなければならないと思います。

石森：ご教示をありがとうございます。私のイメージしている概念とは乖離があったと思いました。二者択一的なところがありました。グローバルとローカルで併存している状態で、オセアニアには明らかにパワーのある帝国発のグローバリゼーションがやってきます。ソロモン諸島では、グローバリゼーションの波に対して防波堤にもならない国家よりは、教会のネットワークの方が当てになると考えられている傾向があるように思います。また、ペンテコステ派の受容においては、聖霊の体験とそれに裏打ちされた聖書の真正さという改変を許さない中核がある一方で、人びとはそれを自分たちの都合にもとづいて受け入れ、位置づけていると思います。

倉田：今回の発表では、「グローバル・イシュー」としてのサモアの保健医療に関する援助や政策が外部の事情によって転換され、「人・モノ・情報のグローバルな流動」によってサモア社会自体が変化するなかで、人びとがどのように病気と向き合うようになっているかを述べました。補足になりますが、ただひとつ指摘しておきたいのは、このような対応をサモア社会による翻訳として捉えるのは楽観的すぎるということです。その過程では、かつての画一的な価値や対処のあり方が揺らぎ、村落や親族集団やそれよりも細かな格差が顕在化し、サモア社会がまとまりや一体感を次第に失いつつあるという面があるからです。

山本：発表の最後に、それほど早期にサモア流の選挙制度がなくなることはないと話しまし

た。先ほどから、サモアのグローカリゼーションの意味をずっと考えていましたが、やはり大きな問題は、ある意味、民主主義というのがサモア人にとっては押しつけられた制度であるという点だと思います。つまり、グローバルの価値、民主化すべきというのがまず先にあったのであって、自分たちの方へ取り込むというのとはちょっと違っていた。ところが、いまではサモアの人びとは、自分たちの制度を民主主義の制度だと思っていこんでいる。この辺のところは、もうちょっと理論化しないと話せないなあと考えています。

風間：今回の議論では、人権とか民主主義とかいった、政治的次元の話にやや重点がおかれていたように感じました。ただし、福井さんも指摘したように、このような価値は、植民地以降の圧倒的な力の差が前提として押し付けられたのであって、それがあたかも最初からグローバルなスタンダードとして生まれたかのように考えられがちな点に注意しなければなりません。グローカリゼーションという視点は、このような繰り返し現れる「普遍性」に対して、ローカルな解釈のあり方から批判を加えてゆくという点においても意味があるのではないのでしょうか。

この後、会場からの質疑応答があり、「グローバルとローカルの中間領域としてのリージョン概念の提示」、「オセアニアとアフリカ研究におけるモダニティの捉え方」、「グローバルなシステムとローカルな社会との関係のあり方」などに関して活発な意見交換が行われ、第1日目のシンポジウムは盛況のうちに幕を下ろした。